

私は TPP 参加交渉への関心が高まると同時に、今まで全く考えず、知ろうともしなかった農家の高齢化、減少により日本の農業がいかに危うい立場に置かれているのかを考え、今の農業の危機を実感しました。しかし、その一方で若者の農業の参入も注目されています。そこで実際に農業の現状を体感すると同時に、農業をはじめた若手農家の方から直接お話を聞かせていただくために、国内研修の場として選んだのは、福岡県の西部に位置する糸島市です。農業をはじめ、漁業、林業、畜産業がさかんな地域です。人口 9 万人弱の人々が暮らし、自然に囲まれ、透き通った青い海が広がり、川が流れ、山々が連なり、田園地帯が広がる町です。

今回の研修では、直接お話を聞かせていただくだけではなく、収穫をしたり、めったに入ることができないような辺り一面田んぼの中に入れていただき、まさに東京では感じることができない近さで自然を感じることができました。私自身、はじめて農業に携わっている人から直接お話を聞かせていただき、自分が知らないことを多く学ばせてもらいました。その一つが今、後継者不足が世間では騒がれています。ですが、現実問題として後継者がいないのではなく、親のきつい仕事を見ている子どもが、親の仕事を継ぎたがらないために、後継者不足になっているということです。テレビや新聞の間接的な情報から、私はてっきり、地方の過疎化で子どもは農業をせずに、都市に働きに行ってしまうものだとどこかで決めつけていました。この話を聞き、感じたことは、自分が直接携わっていない分野や、物事には、テレビや新聞、本から知ることのできる間接的な情報や知識から自分なりの解釈をあたかもそうのように、信じ切って、その世界を見ていることを再認識しました。今回の農業体験も事前に調べていましたが、勝手に決めつけていたイメージで農業を見ていたんだと強く感じました。私が抱いていた農業のイメージと実際に農業に携わっている人たちのイメージが全く異なっており、思ってもいなかった発見や気づきが多くありました。たとえば、農業はきつい、つらい、汚いが世間のイメージかもしれません。ですが、何が一番大変かという、一つの品目を作ることだそうです。たとえばキャベツを作ると毎日毎日キャベツの世話をし、毎日毎日キャベツの収穫をして、選別をしなくてはならず、一つの品目を育てるのは飽きてしまうそうです。少し考えれば、気づきそうなことですが、私は、一つの品目を作る大変さよりも、暑い中畑を耕したり、虫を取ったりする大変さしか想像できませんでした。他に、農家の仕事の約 6～7 割は、畑を耕すことではなく、出荷作業であり、野菜を洗うこと、傷んでいるところを取り除くこと、選別、袋詰めが主なことだと知りました。野菜を育てることよりもこの出荷作業が一番大変だと言っていました。出荷作業の時はお手伝いが欲しい、働きに来てよと笑いながら言っていました。こういった、人の手を求めているところは、農業地域はもちろん、ほかの地域でも多いんだろうと痛感しました。また、そのお話を聞いていて、野菜を作ることはできなくても、野菜を洗うことも、はっぱを切ることも、傷んだところを取り除くこともできるのに、世間で求められている野菜は綺麗に袋詰めされた野菜なんだと知り、少し悲しくなりました。自分が知らないことが山ほどありました。ですが、農家の人からしたら当た

り前のことです。自分が野菜を当たり前食べているのに、どれだけ作っている人たちのことを知らないのだと情けなくなりました。私たちの質問の中に農家さんが今わたしたち若者に、農業に携わっていない人々に求めるものとは、何ですか。という質問がありました。農家さんたちの答えは、野菜の旬を知ってほしい、人参には葉っぱがあることを知ってほしい、まっすぐなキュウリだけではなく曲がったキュウリもあることを知ってほしい、そのどれもが、農家さんには当たり前のことでした。自分たちで野菜を作れば、否が応でも知ることです。農家とつながりの強かった昔なら、ほぼみんなが知っていることです。しかし今、野菜はスーパーマーケットで泥のついていない、はっぱのついていない、きれいな野菜しか売られていない世の中で、子どもたちは、こういった野菜のことを知らないと思うと、寂しくなります。もちろん、私もその一人です。はっぱを見ただけで、何の野菜か見分けが付きません。私も、現代っ子の一人なんだと痛感しました。今、世の中で求められている野菜は、綺麗な野菜だけれど、これがいつか、曲がったキュウリも、泥のついた人参も、はっぱのついた人参もみんな、スーパーに並ぶ日が来ないかなと話を聞いていて思いました。

農業に従事している人それぞれ、農業に対しての考え方が似たり寄つたりのものではなく、天と地さえくらい離れた考え方持っていることを実感しました。たとえば、野菜の売り方として、農協一本で行くのか、もしくはレストランに卸してもらうのか、ネット販売をするのか、などさまざまです。また、おじいさんから続いてきた農家ならば、昔からのやり方で続けていきます。今、このソーシャルネットワークが進歩した世界で、ネットを利用しないことはもったいないという人もいれば、そんなもん使わんと農協一本でいく人もいます。野菜の売り方だけではなく、補助費の問題についても、補助費をもらわなければやっていられないという賛成の人も、補助費はなくても、暮らしていけるし、逆に向上心が湧くという反対の人もいます。補助費のこと自体、今回詳しく知った私には、どちらがいいのか判断が付きませんが、人の価値観の問題であり、どちらが正しいか決めつけることはできません。農業に従事している人だけではなく、いかに多くの人たちが満足いくか、また私みたいに補助費のことを知らない人たちに補助費を知ってもらい考えてもらうしかないのかなと思いました。

また、今回農業体験として、裸足で田んぼに入らせていただきました。そこで、東京では感じられない空気と風を、自分の体で感じました。田んぼの土は、とても歩きにくく、ですが柔らかく滑らかで、気持ちがよく、辺り一面田んぼが広がり、とても心が穏やかになりました。風が吹くと、稲がささーと波打ちます。それが、とても心地よかったのを感じています。よく東京は息が詰まるといいます。東京にいと、人混み、騒音、人のイライラ、ガス、など人が自然とかけ離れているから、病気になってしまうのだと、ある農家の方が言っていました。私が田んぼで何かを感じたように、人間みんな、ぜったい自分の中にある感性で何かを感じます。それは、においだったり、音だったり、景色であったり、十人十色ですが、自然から、パワーをもらうのです。東京に戻ってきて、電車の人混みに

埋もれながら、私は自然とかけ離れている生活をしていることをさらに実感しました。

今回私は、福岡に来てその中でも、糸島市を選び、学ぶことができたことに、この出会いに感謝したいです。自分の目で、肌で、心で、五感で、感じなくてはわからないもの、気づかないものは多くあります。それを、今回改めて感じさせられ、未熟者の自分を思い知らされました。見ず知らずの私たちを温かく、おもてなししてくれた福岡県糸島市で出会った方々に感謝しています。この出会いが、私自身に新しい知識や今までの考え方、また価値観を広げさせてくれました。また、実際に自分の足で確かめることの重要性を学びました。この体験を無駄にすることなく、自分が自分で見つけられたことを掘り下げていきたいと思っています。